

郷里（井原市美星町）では、秋が近づくと祭りの打ち合わせがはじまる。

氏神と産土荒神、それぞれの総代と当番・当番組で確認できたところで、注連縄や薦づくり、斎燈木づくりなどの準備がはじまる。それは、備中一円の農山村に共通する年中行事というものである。

ところが、祭典はともかく、神楽をどうするか、迷って決めかねることもなる。氏神の祭礼では毎年、荒神の祭礼では式年（一般的には7年ごと）に神楽を奉納するのがこれまでの習慣であった。それを中止、と決めることも少なくないだろう。

コロナ禍のもとのやむなきこと。昨年もそうであった。今年もそうなる可能性が強い。

せっかく当番（頭屋）をつとめるのに神楽がないとは、とお嘆きの方も多からう。しかし、それにとどまらない。このことは、日本中の村里の民俗芸能の存続に共通する悩みなのである。

そうでなくても、過疎化への対策がままならぬところが多い。そこでの年中行事や民俗芸能を休止する。それが、1年でなく2年、3年と続くこととなるか。そのまま存続ができなくなる。その恐れも大きいのである。

ただ、備中神楽の場合は、他とは少し異なる。太夫と称する中世系の芸能者6人が組む神楽社中があり、依頼を受けたところの祭礼に向いて神楽を演じる。それには謝礼が伴うので、そのうちでは

民俗芸能の危機

シニアの流儀

神崎 宣武

神楽中断で継承難しく

巫人の芸能者ということになる。それに準じる巫人神楽となると、備後神楽・安芸神楽・石見神楽など、中国地方の神楽が多い。しかし、日本全体でいうと、その集落の祭礼にかぎり氏子や産子が奉納するもので、他へ出向くことはない。謝礼も伴わないので、そのところでは素人神楽なのである。とくに、存続がやぶまれるのは後者の民俗芸能である。

近年、「通い神楽」で存続をはかるようになった事例もある。通い神楽とは、集落の出身者がその時季だけ帰郷して神楽に加わる。日向山地（宮崎県）のいくつかの神楽がそうである。また、集落外の神楽好きの人を受け入れて稽古や出演に加わってもらう。花巻（岩手県）の大償神楽などがそうである。近年、そうした地域おこしの試みが芽ばえていた。それも中断することになる。いちど中断すると、

これもその再生が容易ではないだろう。備中神楽についても、危惧するところがなくはない。巫人神楽であるかぎり、素人では真似のできない術が伴わなくてはならない。それは、能の世界でいう「序破急」（緩急の推移を律する基礎原理）に通じるだろう。そのためには、演じる回数をこなすことと熟練した年長者との相（合とも）を厭わないことにある。それがあって、備中神楽は高い精度をもって伝えられてきたのである。しかし、神楽の実演機会が少なくなると、その高い精度の維持にも不安が生じることになる。

そのことは、私の小体験からもいえるのだ。私は、会議や講演で年間100日ばかりの移動をしていた。約30年ほどは、そのくりかえしであった。資料にもあたり、年号や固有名詞のメモを用意した。人前に出る体裁も整えて移動を重ねてきた。だが、昨年から今年にかけて、そうした機会が激減した。すると、そこで身についていたはずの、たとえば時間配分などがうまくいかなくなっているのである。話のオチ（結末）が少し早まったり、少し遅れたり。こんなはずではなかったのに、とむつかしさを実感しているのである。

オンラインで解決できるものでもない。そこでも見落とされがちな地方にあっての伝統文化。コロナ感染のおさまるのを待つしかないが、危機的な状況にあることだけはしかと認識しておいて。

（民俗学者）

＝月1回掲載

